

## 関西大学哲学学会則

### 総則

第一条 本会は関西大学哲学会と称する。

第二条 本会は、哲学、倫理学、宗教学、美学および美術史に関する研究・教育の補助機関として、会員相互の研究ならびに人間的交流をはかることを目的とする。

第三条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (一) 毎年一回、定期総会を開催し、また毎年二回、研究発表会を開く。研究発表会は公開とする。また随時、臨時総会、公開または非公開の講演会あるいは研究発表会を開くことがある。

(二) 機関誌『哲学』を随時発行し、また毎年一回、『哲学会会報』を発行する。

(三) 第二条の目的を達成するため、学内および学外の諸研究機関と、機関誌の交換等を通じて、連絡をはかる。

(四) 関西大学文学部哲学科および同大学院文学研究科哲学専攻に属する学生および院生の研究を補助

する。

(五) その他、必要と認める事業を行う。

第四条 本会は原則として左記の会員をもって組織する。

(一) 関西大学文学部哲学科の専任教員、およびそれ以外の関西大学専任教員の有志

(二) 関西大学文学部哲学科ならびに関西大学大学院文学研究科哲学専攻に在籍する学生および院生  
 (三) 前項に記載する学科ならびに専攻に在籍した者の有志、およびそれ以外の本学学生または院生の有志

### 機関

第五条 本会には次の機関を置く。

(一) 総会

(二) 委員会

第六条 総会は本会の最高議決機関であつて、次のことを審議し議決する。

(一) 哲学学会則の決定ならびに変更

(二) 委員の選任および解任

(三) 予算、決算の承認

(四) その他の重要な事項

第七条 定期総会は毎年一回、委員長がこれを招集する。このほか、委員会において必要と認める場合には、

委員長が臨時に総会を召集しなければならない。

第八条の一 委員会は本会の執行機関として、総会の議決に従い、本会会則に定める業務を行う。

第八条の二 委員会はその業務を処理するため、事務局を関西大学文学部哲学科合同研究室に置く。

第八条の三 委員は次の者とする。

(一) 本学哲学科専任教員全員

(二) 本学哲学科一部各学年より選出される者、各学年二名、計八名

(三) 本学哲学科二部各学年より選出される者、各学年二名

(四) 本学大学院文学研究科哲学専攻博士課程前期より選出される者、および同博士課程後期より選出される者、上限各二名、計四名

第九条 委員会に次の役員を置く。

(一) 委員長 一名

(二) 幹事 一名

(三) 編集委員 三名

役員は総会において選任する。ただし委員長、幹事は委員中より互選され、また編集委員は委員会が委嘱し、総会がこれを承認する。

第十条 委員会は、必要に応じて委員長が召集する。

第十一条 委員の任期は一年とし、留任をさまたげない。

第二条 委員長は本会および委員会を統理し、これを代表する。幹事は事務局を統轄し、委員長に事故あるときはこれを代理する。

第三条 委員長の任期は一年とし、留任をさまたげない。

第四条 幹事の任期は一年とし、留任をさまたげない。

第五条 編集委員は、本会機関誌、会報等の編集発行にあたる。編集委員は委員会の決定によつて本学哲学科専任教員に委嘱される。

第六条 編集委員の任期は一年とし、留任をさまたげない。

第七条 機関誌『哲学』に掲載する論文の採否、および研究発表会の発表者の選考は、委員会の委嘱を受けて、編集委員あるいはその他の本学哲学科専任教員が審査にあたり、委員会においてこれを決定する。

## 会計

第十八条 本会の経費は、会費、寄付金その他の収入をもつてこれにあてる。

第十九条 会員は毎年会費(三〇〇〇円)を醸出しなければならぬ。ただし本学哲学科在學生は、原則として学部入学時に四年間分の一二〇〇〇円を一括納入するものとする。

第二〇条 本会の会計年度は、毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日をもって終わる。

第二一条 委員会は定期総会において、前年度の決算を報告するとともに当年度の予算案を提出し、その承認を得なければならない。

第二二条 本会は総会において会計監査を一名委嘱する。会計監査は本会の会計を監査する。

付則 この会則は、一九九一年六月二九日より効力を生じる。

## 関西大学哲学学会会計内規

第一条 会員に対しては原稿料、講演料は原則として支払わない。

第二條 学会主催の研究会、講演会等の講師に対する謝礼は、そのつど委員会においてこれを定める。

付則 本内規は一九九一年六月二九日より施行する。

### 編集後記

文学部人間は、どのような対象を扱っていても、最終的に文章で表現するのだが、他のメディアを試みようとする人にもしばしば出会う。故柏木隆夫先生はそのような多才人のひとりだった。先生のお宅に伺うと、椅子に座った少年の絵が玄関に掛けてある。そこには、息子をとらえる父親の眼差しと同時に、ピエロ・デッラ・フランチェスカか、一時期のピカソを思わせる確かな形態感覚がある。その先生が師事した画家のことを、京都岡崎の星野画廊が記事にしてくれた。先生の多才を追悼するために、これを巻末に再掲した。

# 鶴田吾郎

**石を磨く**  
美術史に隠れた珠玉

長い闘病生活の後、昨年末、鬼籍に入った関西大学教授の相木隆彦さんは宇都宮市の生まれ。京都大学でイタリヤ美術史を学び、レオナルド・ダ・ヴィンチの研究として名馳せた

人だ。若い頃に愛した画家になることはできなかったが、友人の教授だと油絵のグループ展を何度か開催し、私の画廊にも時々、顔を覚えてくださった。あのとき、「思いついた所、自分の先生に出会った機かしのなせ、また教師であつた鶴田吾郎(一八九〇-一九六九)の水畫を購入された。どうぞと鶴田に絵を習うことがあつたらしい。



「アムニタの娘」(一九三〇年 油彩)

## 出会いから生まれた傑作

関西にあまり縁のない鶴田吾郎の名は知らなくても、中村彝の近代絵画の名作「エロシエ」氏の像」を見たことのある人は多いだろう。

一九〇九年九月、四年にわたるロシア放浪の旅の果てに帰国した鶴田は、目白駅の本ムで盲目のロシア詩人・エロシエに会に出会う。さぞくモラルになつてもうこうと頼み、エロシエのその後援者だった新宿・中村屋の相馬黒光の承諾を得て、中村彝のアトリエで中村と一緒に描いた。第二回常展出品した「盲目のエロシエ」は鶴田の代表作ではしたが、夭折した中村彝の作品の方が有名になり、その陰に埋もれてしまつた。

鶴田はまた、近代美術史の重要な作品のモラルとなつたもうひとりの人物にも出会つていく。彫刻家、中原俊次郎の若きカフカス人のモナル、ニッソだ。ロシア放浪の途中、大連で出会つたという。

嘗て、画友たちが鶴田に贈った繪名は「ルタスキ・エロイツチ」。一九三六年に彼が描いた唱「シャリヤ」にも有名だ。本作「アムニタの娘」は、欧州再訪中に出会つた少女の彫の深い、端正で理知的な顔たちに、かつてエロシエを描いた時に覚えた感動を思い起こし、再び表現しようとしたものだろう。最近入手したこの名作を、相木さんに指見せでき

(豊野園蔵主)